

皿池湿原

【三田市テクノパーク】

広さ17㉩、大小10の湿原群や湿生林などの多様な生態系が凝縮。隣接するテクノパークの企業と三田市の協働によりボランティアの手で保全が進められ、県の天然記念物に指定されました。普段は入れませんが、定期的に見学会が催されています。



皿池湿原ホームページ



もしくは
<http://hitosato.jp/> から

アクセス:三田西インターから
車で約5分

守っている人たち

皿池湿原の守り人



兵庫県広報誌 Hyogo
県民だより 運動企画!

「皿池湿原の守り人」は、兵庫県三田市にある皿池湿原の保全活動を行っています。

広さ17ヘクタールの皿池湿原区域には、大小10の湧水(ゆうすい)湿原に加え、湿生林、ため池などの多様な生態系が凝縮しています。

63種の希少種が確認されており、兵庫県レッドデータブックのAランク(絶滅の危機に瀕している種)が4種、Bランク(絶滅の危機が増大している種)が12種、Cランク(存続の基盤がぜい弱な種)が23種と希少種の宝庫です。

皿池湿原の多様な動植物の多くは、人が里山として湿原を利用・管理してきたおかげで生き残ってきたと考えられています。しかし、人の生活様式の変化に伴い、里山としての皿池湿原は放置され、樹林化が進みました。

さらに1990年代には住宅・都市整備公団による開発事業が浮上し、湿原喪失の危機を迎えました。幸いにも、その後の日本の景気減退と環境意識の高まりから、三田市と企業が協働し、皿池湿原を保全する方針に転換され、保全事業が進められてきました。

しかし、湿原環境の維持には単発的な保全事業だけではなく、不断の手入れが欠かせません。半年放置すればササ類やヌマガヤが生息地を広げ、サギソウ(Bランク)やトキソウ(Cランク)などの小さな植物を駆逐していきます。

このような課題を背景にして結成されたのが、「皿池湿原の守り人」です。兵庫県立人と自然の博物館と、ひょうご環境創造協会の専門的な指導の下、ササ類や木本の伐採、セトウチサンショウウオの産卵場所保護や、園路整備を行っています。また、定期開催している一般見学会では、案内役となり里山保全の大切さを伝えています。また、ハッチョウトンボ親子観察会や、緑の少年団での見学会を開催するなど、子供への啓発にも力を入れています。関西学院大学の学生さんとは「子供向け里山工作教室」を定期共催し、青年層に対する次世代の保全家育成にも取り組んでいるところです。

2020年は、コロナ禍によって4月5月の活動が中止となった影響で、ヌマガヤの刈取りができなかったエリアではサギソウ(Bランク)が咲きませんでした。残念な出来事である一方、不断の管理がいかに生物多様性を支えていたのかを目の当たりにし、守り人の結束力がより高まったと感じています。

今後、保全活動を永続していくためには、趣味性が強いボランティア活動だけではなく、かつての日本農村にあったような、暮らしの一部としての里山管理が望まれます。そこで、伐採木を使った木炭作りや、伐採したササ類を固形燃料や家畜飼料へ活用するなど、里山資源によるバイオマスエネルギー利用を、行政・企業と協働しながら促進していきます。『里山からの恵み』の魅力を高めれば、若い人にも里山に入る動機が生まれ、次世代の保全家育成に繋がると考えます。同時に、皿池湿原の学校イベントや、里山利用者に向けたセミナーなど、生物多様性保全の啓発を積極的に行っていきます。里山生態系に配慮した資源の適正利用が生物多様性の保全に繋がり、里山生態系の恩恵を永続的に享受することが可能になります。資源利用の促進と、保全の啓発を両輪とした『暮らしに溶け込む里山との新たな付き合い方』を皿池湿原で実践し、その成果を全国へ発信することで、人と自然の共生社会に貢献していきたいと考えております。